

一国内動向一

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和7年11月)

【ポイント】

- 気温は、沖縄・奄美で高く、降水量は、東日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なかった一方、沖縄・奄美ではかなり多かった。日照時間は、東日本日本海側でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万9036トン、前年同月比91.7%、価格は1キログラム当たり306円、同99.8%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3932トン、前年同月比96.1%、価格は1キログラム当たり287円、同99.0%となった。
- 年末年始に供給がひっ迫するような野菜品目は見当たらないと予想される。やや不作であるばれいしょとたまねぎは、引き続き高値が予想される。

(1) 気象概況

上旬の旬平均気温は、沖縄・奄美では高く、北日本、東日本、西日本では平年並みだった。旬降水量は、北・東・西日本で天気は数日の周期で変わり、北日本日本海側では低気圧や低気圧通過後の一時的な冬型の気圧配置による寒気の影響により、曇りや雨または雪の日が多くなった。1日には急速に発達した低気圧の影響で、北日本と東日本日本海側を中心に11月としては記録的な大雨が降った所があり、北日本では大荒れの天気となった所もあったことから、北日本太平洋側でかなり多く、北・東日本日本海側では多かった。旬間日照時間は、北日本日本海側で少なかった。沖縄・奄美でも天気は数日の周期で変わったが、前線や湿った空気の影響で、旬降水量は多かった。

中旬は、数日の周期で、低気圧が発達しながらサハリン付近を通過し、通過後には北日本を中心とした西高東低の冬型の気圧配置となった。冬型の気圧配置が強まった18日には、青森県酸ヶ湯では積雪差日合計が76センチメートルとなり、1979年の統計開始以降11月としての多い記録を更新した。一方、東・西日本は移動性高気圧に覆われやすく、低気圧、前線や寒気の影響が小さかつた。旬平均気温は、沖縄・奄美では高く、北日本、東日本、西日本では平年並みだった。

旬降水量は、北・東日本太平洋側と東・西日本日本海側でかなり少なかった。一方、沖縄・奄美は、期間前半は暖かく湿った空気に覆われやすく、台風第26号や停滞前線などの影響を受け、記録的大雨となった所もあったため、かなり多かった。旬間日照時間は北日本太平洋側と東日本日本海側でかなり多かった。北日本日本海側、東日本太平洋側では多かった。西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並みだった。

下旬は、西日本を中心に移動性高気圧に覆われて晴れた所が多かった。日本の北では数日の周期で低気圧が通過し、北日本を中心に低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだ日があったため、旬平均気温は北日本ではかなり高かった。東日本、西日本では高かった。沖縄・奄美では平年並みだった。旬降水量は、北・西日本日本海側、北・東・西日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかった。旬間日照時間は、移動性高気圧に覆われやすく、寒気の影響を受けにくかった東日本日本海側では、旬間日照時間の平年比が145%となり、1961年の統計開始以降、11月下旬として1位の多照となったことから、北・東・西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本太平洋側と沖縄・奄美で多かった。北日本太平洋側では平年並みだった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本							日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側			
西日本									

資料：気象庁「11月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は9万9036トン、前年同月比91.7%、

価格は1キログラム当たり306円、同99.8%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（11月速報）

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	99,036	91.7	84.7	306	99.8	128.1	306	308	304
だいこん	10,303	106.0	93.2	95	80.7	128.5	107	99	78
にんじん	5,124	76.5	70.7	204	135.4	151.9	192	223	197
はくさい	14,981	91.4	97.6	66	82.9	123.0	74	67	57
キャベツ類	12,390	107.1	88.7	92	44.3	92.6	93	92	91
ほうれんそう	1,485	92.3	85.6	585	104.8	134.9	630	588	542
ねぎ	4,662	94.6	93.0	401	89.3	120.7	408	405	388
レタス類	5,901	95.8	88.1	210	77.7	118.4	207	209	216
きゅうり	3,439	97.9	74.4	576	84.3	153.7	659	561	508
なす	1,478	94.1	77.1	471	96.9	118.2	426	506	490
トマト	2,344	78.8	57.6	966	130.8	180.0	997	1,033	874
ピーマン	1,407	93.1	71.8	696	97.6	150.4	629	728	730
さといも	712	89.3	78.4	378	120.4	134.7	378	379	378
ばれいしょ	5,118	73.7	79.1	268	203.7	193.0	248	269	289
たまねぎ	6,448	73.4	76.8	221	176.8	171.8	215	224	226

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年（令和2～6年）平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、北海道産の出荷が終了した中旬以降上がり、下旬にやや落ち着いたものの高値で推移し、高値で推移した前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、ほうれんそうの価格が、高冷地出荷分が終了し、平坦地出荷分が増量となった中旬以降落ち着いたものの、高値で推移した前年をやや上回り、平年を3割以上上回った（図3）。

果菜類は、トマトの価格が下旬にやや落ちていたものの、大幅に高値で推移した前年を3割強上回り、平年を8割上回った（図4）。

土物類は、ばれいしょの価格が、絶対量不足から堅調推移となり、やや安値で推移した前年の2倍以上の価格となり、平年を9割以上上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

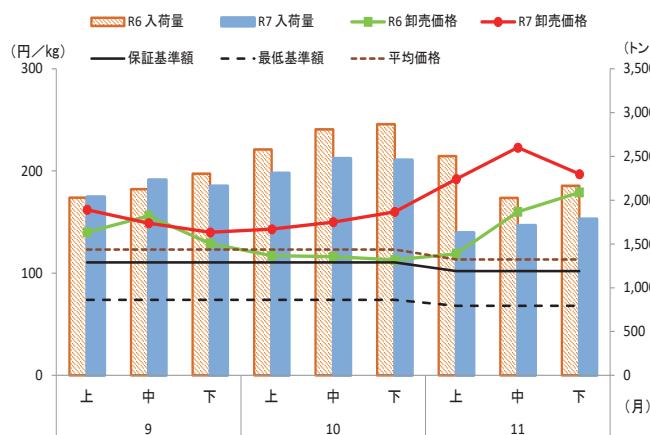


図3 ほうれんそうの入荷量と卸売価格の推移

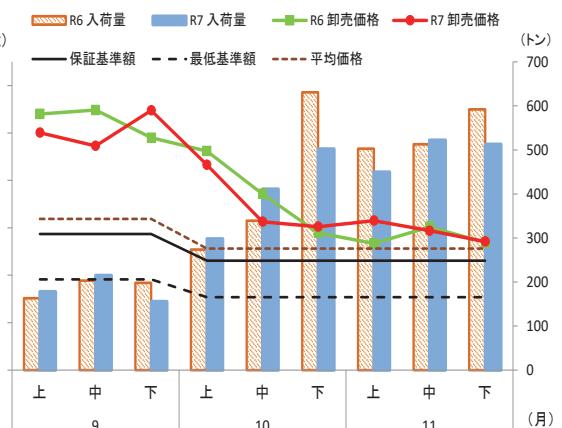


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

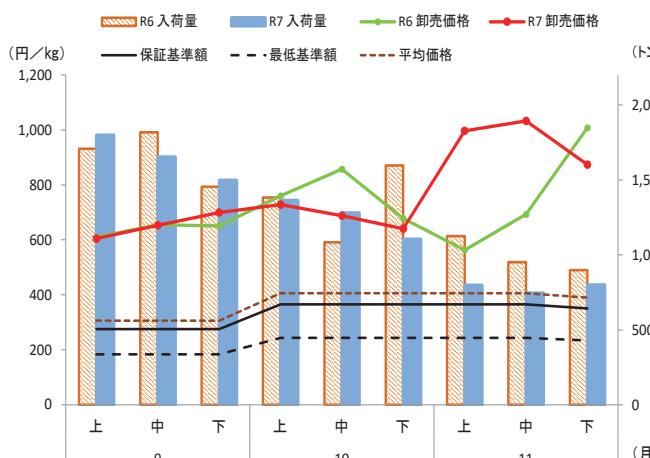
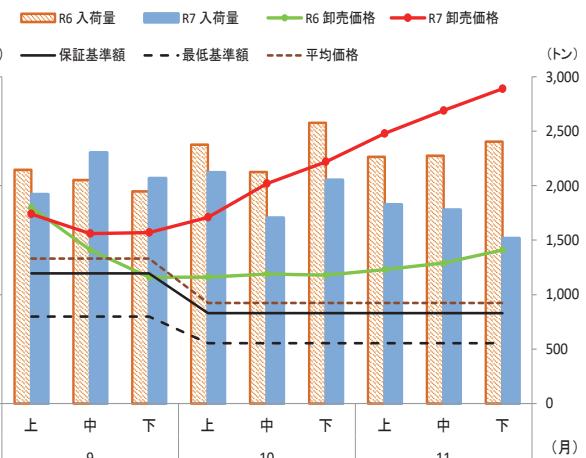


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	<p>千葉産、神奈川産中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおむね順調である。一部で乾燥によるこぶ症などの生理障害が散見されたが減少してきており、品質も良好となってきている。神奈川産の作付面積は前年並みで、播種期の高温・乾燥の影響はあったものの、生育は順調である。やや虫害が散見される。総入荷量は、やや少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を下回った。</p> <p>価格は、中旬以降軟調な展開となり、大幅な高値で推移した前年を2割弱下回り、平年を3割近く上回った。</p>
	にんじん	<p>千葉産が中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、播種期の高温・乾燥による生育遅延に加えて、10月の低温や日照不足で徒長傾向であった。空洞の発生も散見されており、生育はやや不良である。輸入の中国産は、前年を4割以上上回った。総入荷量は少なかった前年を2割以上下回り、平年を3割弱下回った。</p> <p>価格は、北海道産の出荷が終了した中旬以降上昇し、下旬にやや落ち着いたものの高値で推移し、高値で推移した前年を3割以上上回り、平年を5割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は、前年の高値により生産者の作付け意欲が高く、前年をやや上回った。高温の影響により初期生育は遅延傾向も、その後は大きな天候被害もなく生育は順調である。総入荷量は、やや多かった前年を1割近く下回り、平年をわずかに下回った。</p> <p>価格は、增量に伴い旬を追うごとに落ち着きを見せ、大幅な高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を2割以上上回った。</p>
	キャベツ類	<p>千葉産、愛知産、茨城産中心の入荷であった。千葉産の作付面積は前年並みで、10月中旬までの気温高に恵まれ、生育は前進傾向であった。病害は散見されるが、大きな影響は見られない。愛知産の作付面積は前年並みで、適度な降雨にも恵まれ生育は順調であった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により、定植や生育がやや遅延していたものの、その後の降雨により回復傾向となつた。総入荷量は、大幅に少なかった前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、大きな動きはなかったものの、暴騰した前年を5割以上下回り、平年をかなりの程度下回った。</p>
	ほうれんそう	<p>群馬産、茨城産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥により生育停滞が散見されたが、生育はおむね順調であった。虫害の発生がやや多かった。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響で一部播種の遅延が散見されたが回復し、おむね順調であった。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、高冷地出荷分が終了し、平坦地出荷分が増量となった中旬以降に落ち着いたものの、高値で推移した前年をやや上回り、平年を3割以上上回った。</p>
	ねぎ	<p>秋田産、青森産を中心に北海道産、茨城産の入荷があった。秋田産の作付面積は、前年並みであった。夏場の高温・乾燥に加えてその後の豪雨などから、徐々に肥大は回復したものの、生育停滞や病害の発生が見られたほか、虫害も平年より多かった。青森産の作付面積は、前年をやや上回った。定期的な降雨により生育は回復し、肥大も良好である。北海道産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による肥大不足からは回復した。茨城産の作付面積は前年並みで、夏場の高温・乾燥で前年多発した軟腐病などは少ないものの、生育、肥大は遅延傾向である。関東産の秋冬作全体として、細物が多い。輸入の中国産は、前年をわずかに上回った。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、関東産が出荷開始となった中旬以降に落ち着きを見せ、高値で推移した前年を1割強下回り、平年を2割強上回った。</p>
	レタス類	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により、一部産地で生育遅延が見られたが、おむね順調であった。後続の静岡産や、ほか西南暖地は、降雨の影響により定植にばらつきは見られたものの、高温・乾燥は解消され、若干の遅延は散見されたが、おむね順調であった。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、月間を通して大きな動きはなく、大幅な高値で推移した前年を2割以上下回り、平年を2割近く上回った。</p>
果菜類	きゅうり	<p>宮崎産、埼玉産、群馬産中心の入荷であった。宮崎産の作付面積は、前年をやや下回った。一部曇雨天の影響で生育不良や虫害が散見されたが、おむね順調である。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温の影響により樹勢が弱く、奇形果、流れ果が散見されるほか、病害も散見され、虫害も平年より多い。群馬産の作付面積は前年並みで、抑制作はほぼ終了した。病虫害も散見された。総入荷量は、大幅に少なかった前年をわずかに下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、高値続きの上旬から下旬に向けて徐々に落ち着きを見せ、暴騰した前年を1割以上下回り、平年を5割以上上回った。</p>
	なす	<p>高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、10月中旬は高温であったが、下旬は平年並みの気温に低下したことから、生育は平年並みに落ち着き、生育はおむね順調であった。虫害は散見されたが、病害は少ない。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、関東産の出荷がほぼ終了した中旬以降に堅調な状況が続き、高値で推移した前年をやや下回り、平年を2割近く上回った。</p>

	トマト		熊本産、千葉産、愛知産、栃木産中心の入荷であった。熊本産の作付面積は、前年並みであった。夜温の低下による裂果が多く、病害も散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、一部圃場で10月の日照不足や気温の低下による裂果、色回りの遅延が散見されたが、おおむね順調であった。病害も散見されたが、前年より少なかった。愛知産の作付面積は、前年をやや下回った。9月の高温の影響により小玉傾向で、10月の日照不足によりやや徒長気味だが回復傾向にある。栃木産の作付面積は前年並みで、気温の低下により草勢は回復してきているが、やや小玉傾向で、裂果が散見されている。また、病虫害も散見された。総入荷量は、少なかつた前年を2割以上下回り、平年を4割以上下回った。 価格は、下旬にやや落ちていたものの、大幅な高値で推移した前年を3割強上回り、平年を8割上回った。
	ピーマン		茨城産を中心に宮崎産、高知産などの入荷があつた。茨城産の作付面積は前年並みで、一部低温による障害果が散見され、生育遅延が見られた。宮崎産の作付面積は、前年をやや下回り、生育はおおむね順調だが、一部の圃場では、高温、曇雨天の影響による生育不良が散見された。高知産の作付面積は前年並みで、前月に続き虫害が散見された。10月の気温が平年よりやや高く、圃場によっては流れ果が見られた。総入荷量は少なかつた前年をかなりの程度下回り、平年を3割近く下回った。 価格は、中旬以降高騰し、大幅な高値で推移した前年をわずかに下回り、平年を5割強上回った。
土物類	さといも		埼玉産を中心に愛媛産などの入荷があつた。埼玉産の作付面積は、前年をやや下回った。梅雨時期からの乾燥や、圃場により生育と正品率にはばらつきはあったものの、かん水の十分な圃場については、おおむね平年並みとなった。愛媛産の作付面積は、前年並みであった。目立った病害もなく、玉肥りもよく生育は良好である。輸入の中国産については、前年を8割以上上回った。総入荷量は、少なかつた前年を1割強下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、大きな動きはなく堅調な状況が続き、高値で推移した前年を2割ほど上回り、平年を3割以上上回った。
	ばれいしょ		北海道産中心の入荷であった。作付面積は、前年並みであった。収穫は終了したが、夏場の高温・干ばつの影響で小玉傾向となっており、発芽などの品質不良が散見された。総入荷量は、やや多かった前年を3割近く下回り、平年を2割強下回った。 価格は、絶対量不足から堅調推移となり、やや安値で推移した前年の2倍以上となり、平年を9割以上上回った。
	たまねぎ		北海道産中心の入荷であった。作付面積は、前年並みであった。収穫は終了したが、高温・干ばつ、定植遅れと非常に厳しい環境の影響により、小玉傾向であった。輸入の中国産は、前年を9割以上上回り、米国産が大幅に増加した。総入荷量は前年を3割近く下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、絶対量不足で大玉中心に高値となり、前年、平年ともに7割以上上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3932トン、前年同月比96.1%、

価格は1キログラム当たり287円、同99.0%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向 (11月速報)

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	33,932	96.1	87.6	287	99.0	127.8	289	286	287
だいこん	3,192	113.4	91.8	112	76.4	122.7	129	112	97
にんじん	1,959	72.5	68.8	237	138.6	173.7	222	259	226
はくさい	6,729	109.6	110.3	78	75.4	116.0	86	79	68
キャベツ類	4,105	123.2	93.8	96	41.2	91.7	102	99	88
ほうれんそう	448	98.7	75.5	711	96.7	136.2	841	690	639
ねぎ	1,095	98.2	97.4	511	89.4	114.3	516	525	493
レタス類	1,154	104.1	83.1	212	74.3	120.4	216	209	211
きゅうり	687	95.0	70.0	544	82.3	153.9	644	521	472
なす	460	81.9	83.8	460	100.0	117.3	412	478	489
トマト	684	66.5	54.9	862	143.0	174.2	801	958	839
ピーマン	417	108.3	88.0	678	90.8	143.4	621	704	707
さといも	138	74.7	66.0	434	103.5	133.4	426	437	438
ばれいしょ	2,181	78.1	81.0	282	212.3	212.2	269	286	292
たまねぎ	3,968	79.2	83.4	211	162.3	168.4	208	206	221

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5年 (令和2～6年) 平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

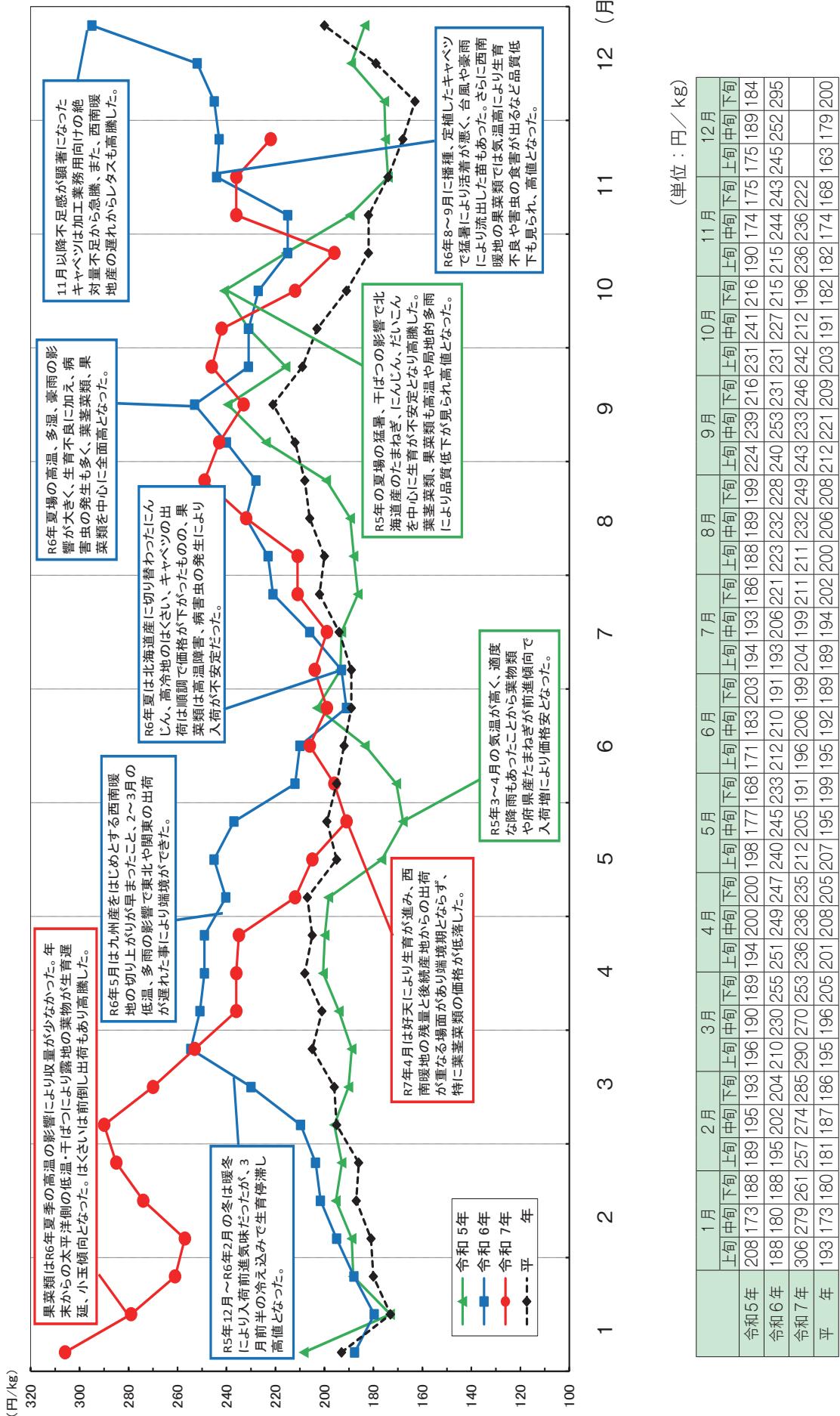
表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	<p>青森産が主体となる入荷で、後続の徳島産、長崎産や北海道産の残量入荷などがあった。月の前半は、各地とも作況が悪く産地出荷量は伸び悩んだが、中旬以降に回復して入荷が増加した。入荷量全体は、旬を追うごとに增量し、月間では前年をかなり上回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、入荷增量に伴い旬を追うごとに下落した。月間では、極端に高値だった前年を2割以上下回り、平年を2割以上に上回った。</p>
	にんじん 	<p>上・中旬は北海道産が主体となり、中旬からスタートした長崎産が下旬には主体となつた。北海道産の切り上がりが例年に比べて早く、後続の長崎産が遅れたことで端境が生じ、入荷量は全旬を通じて伸び悩んだ。国産の不足感から輸入の中国産の入荷が多い状況が続き、月間では前年の2倍近い入荷となった。しかし、月間全体の入荷量は前年、平年ともに3割近く下回った。季節商材の金時人参の入荷がスタートし、香川産の入荷は生育良好による太物が中心であった。</p> <p>価格は、不足感から高値で推移し、月間では前年を4割近く上回り、平年を7割以上上回った。</p>
葉茎菜類	はくさい 	<p>茨城産が主体となり、月の前半では長野産の残量の入荷があった。長野産は切り上がりが早く中旬で終わり、後続産地の愛知産と和歌山産が干ばつの影響で出遅れ、下旬から入荷が開始した。茨城産は生育良好で比較的順調な入荷が続いたが、後続の遅れから全体では下旬に減量となった。月間全体の入荷量は、前年、平年ともにかなりの程度上回った。</p> <p>価格は、需要期を迎える中で気温も下がり引合いは強まつたが、茨城産の順調な入荷が下押しし、旬を追うごとに下落傾向となった。月間の価格は極端な高値だった前年を2割以上下回り、平年を大幅に上回った。</p>
キャベツ類	キャベツ 	<p>愛知産が中心となり、茨城産の入荷などがあった。主力の愛知産は凶作だった前年を全旬とも大きく上回る入荷で、旬を追うごとに增量したが、前段産地の群馬産が早期に切り上がったことに加え、干ばつの影響で茨城産の入荷が減量したことにより、全体としては伸び悩んだ。月間全体の入荷量は前年を2割以上上回り、平年をかなり下回った。</p> <p>価格は極端な高値だった前年を6割近く下回り、平年をやや下回った。</p>
ほうれんそう	ほうれんそう 	<p>徳島産と福岡産が主体となる入荷で、岐阜産の残量入荷などがあった。秋冬作は気温高や干ばつの影響もあり播種時期が遅れたことから出遅れ気味となり、上・中旬の入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、少なかった前年をわずかに下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、前年の単価高の影響もある中で、業務関係などの荷動きが良く引合いが強まって、単価高となり、月間では前年をやや下回り、平年を4割近く上回った。</p>
ねぎ（白ねぎ）	ねぎ（白ねぎ） 	<p>長野産が中心となり群馬産、鳥取産が主体となる入荷であった。北海道産の切り上がりが早く、上旬には切り上がったが、主力産地は干ばつの影響を受けながらも比較的安定した入荷が続いた。月間全体では、前年をわずかに上回った。</p> <p>価格は、需要期を迎えて気温が低くなる中でも引き合いはなかなか強まらず、月間では前年を下回った。</p>
ねぎ（青ねぎ）	ねぎ（青ねぎ） 	<p>青ねぎは徳島産が主体となり、香川産などの入荷があった。細ねぎは高知産が主体となる入荷であった。各地とも生育良好で順調な出荷が続いた。月間全体の入荷量は、前年を上回った。</p> <p>価格は極端な単価高だった前年を大幅に下回り、平年並みであった。</p>
レタス類	レタス 	<p>ラップ物の兵庫産と茨城産が主体となる入荷に、裸物の九州産地の入荷などがあった。夏場の高温と干ばつの影響で定植遅れとなり、上旬の入荷量は少なく、中旬以降は増加傾向となるも伸び悩んだ。サニーレタスは福岡産が中心となる入荷であったが、夏場の高温・干ばつの影響で定植遅れとなっていたところに急な気温低下で生育遅れとなり、入荷量は伸び悩んだ。リーフレタスは福岡産が中心となる入荷であったが、レタスやサニーレタス同様に夏場の高温・干ばつの影響で定植遅れとなっていたところに急な気温低下で生育遅れとなり、入荷量は伸び悩んだ。レタス類全体での月間の入荷量は前年をやや上回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格はレタス、サニーレタス、リーフレタスとも不足感から高騰した。レタス類全体でも、極端な単価高だった前年を2割以上下回り、平年を2割以上上回った。</p>

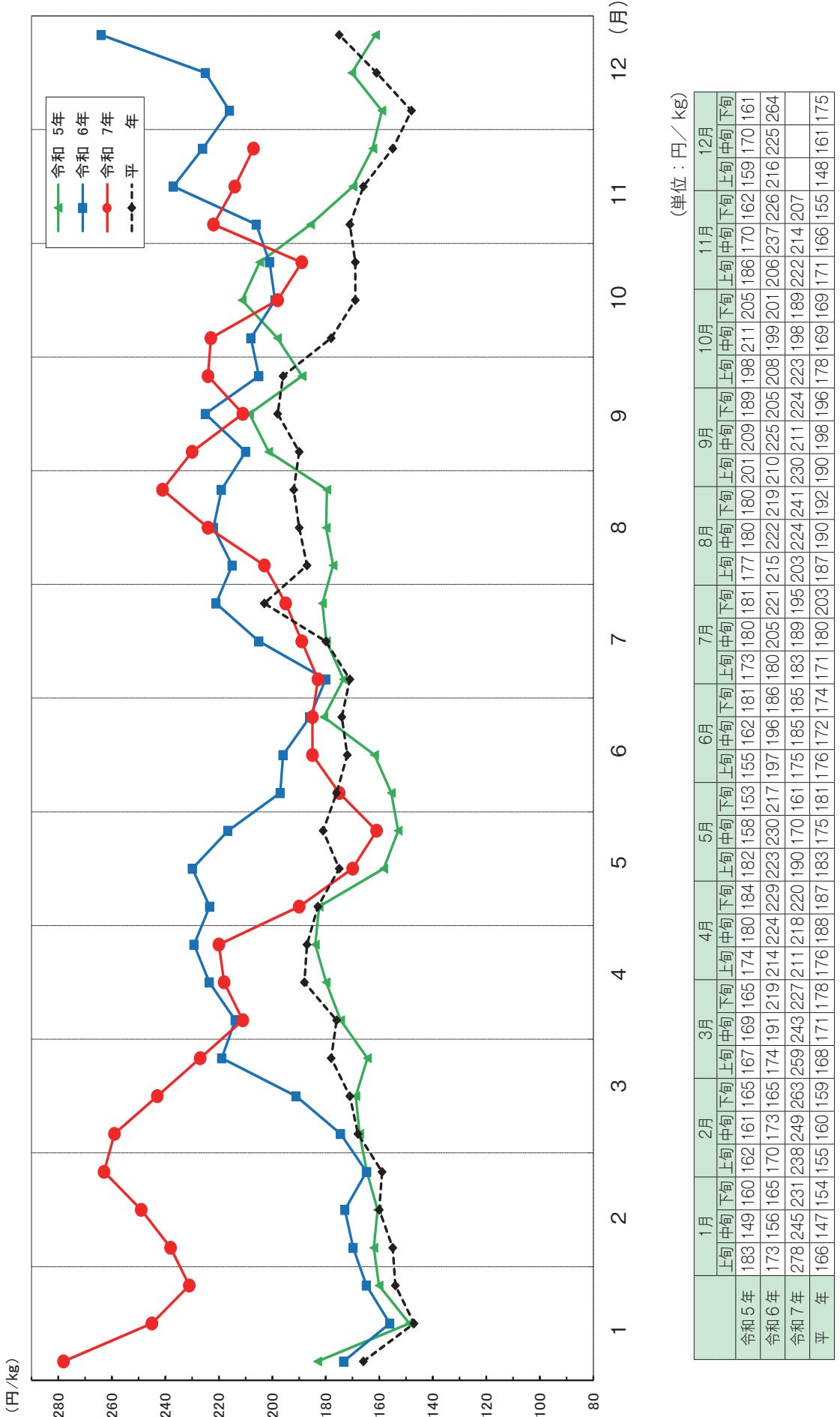
果菜類	きゅうり	<p>宮崎産と高知産が主体となり、大阪産の残量入荷などがあった。各地とも生育は順調であったが、急な気温低下の影響で出荷不安定となつた。全体としては中旬の入荷量が少なく、月間でも前年をやや下回り、平年を3割下回つた。</p> <p>価格は、入荷不安定の中での高値スタートであったが、特売需要などが少なく販売に苦戦し、旬を追うごとに下落した。月間では前年を大幅に下回り、平年を5割以上上回つた。</p>
	なす	<p>千両系は高知産が中心となり、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。前月までの気温高の影響で各地とも前進出荷気味となり、11月に入つて樹勢が低下したことにより加えて、急な気温低下で生育不良となり、産地出荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は前年、平年とも2割近く下回つた。</p> <p>価格は、一定の需要があり、不足感から旬を追うごとに微増傾向ではあったが、月間では前年並みとなり、平年を大幅に上回つた。</p>
	トマト	<p>岐阜産と愛知産が主体となり、熊本産や石川産などの入荷があった。夏秋作の岐阜産は切り上がりが早く、中旬まででほぼ切り上がり、後続の抑制産地は前月までの気温高の影響で生育不良となり、出荷が遅れて端境が生じた。月間入荷量は、岐阜産、愛知産とともに前年を大幅に下回り、熊本産は半分以下となつた。全体の入荷量でも旬を追うごとに減量となり、前年を3割以上下回り、平年を4割以上下回つた。</p> <p>価格は、端境が生じたことで中旬に高騰し、不足感が続いたことで高値推移となつた。月間では前年を4割以上上回り、平年を7割以上上回つた。</p>
	ピーマン	<p>宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。上旬と下旬は、施設産地のピークが重なり入荷増量となつたが、量販店の売場は縮小し、各所とも引き合いは弱く販売に苦戦した。月間全体の入荷量は前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく下回つた。</p> <p>価格は、引き合いが強まらなかつことにより、高値だった前年を下回り、4割以上上回つた。</p>
	さといも	<p>愛媛産が中心となる入荷であった。引き合いが弱い中でも、生協や給食需要があつたが入荷量は伸び悩んだ。業務関係を中心に輸入の中国産の利用が多く、中国産の月間入荷量は前年をやや上回つた。月間全体の入荷量は、前年を2割以上下回り、平年を3割以上下回つた。</p> <p>価格は、入荷量が少ないと国産と輸入の価格差が小さいことから高値推移となり、月間では前年をやや上回り、平年を3割以上上回つた。</p>
土物類	ばれいしょ	<p>丸芋は北海道産が中心となる入荷で、下旬には長崎産が出荷開始した。北海道産は作柄不良で、産地出荷量が極端に少ない状況が続き、月間入荷量は前年を大幅に下回つた。長崎産は出遅れ気味で入荷量は増えず、全体でも前年を大幅に下回つた。メークインも北海道産の入荷で作柄不良のため産地出荷量が極端に少なく、全旬を通して前年の半分以下の入荷量にとどまつた。月間全体の入荷量は、前年を2割以上下回り、平年を2割近く下回つた。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰して推移し、月間では前年、平年とも2倍以上となつた。</p>
	たまねぎ	<p>北海道産が中心となり兵庫産の入荷があつた。北海道産は天候不順から収量が少なく、産地出荷量が極端に少ない状況が続いた。引き合いがある中でも入荷量は伸びず、全旬を通じて前年の半分以下という状況が続いた。兵庫産は順調な入荷が続いたが、北海道産の補てんとしては絶対量が少なく、業務関係では輸入の中国産の利用も多く、前年の1.5倍もの入荷量があつた。月間全体では、前年を2割以上下回り、平年を2割近く下回つた。</p> <p>価格は、絶対量不足から高騰して推移し、月間では前年、平年ともに6割以上上回つた。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。